

生活の困窮隠す子ら

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(5)

38

本島南部の子どもの居場所にならざるは困難だ。学校の宿題をしていいた小学校低学年の子どもたちがけんかを始めた。

「こんなものからんば？」
「おまえバカだな。掛け算九丸の問題を出し合っているうち、答えられない子を別の子がからかった」とが原因だった。からかわれた子が反発し、手を出してどぞけんかになった。からかわれた子は笑顔、掛け算九九が苦手だった。平教名(片仮名の区別もあいまいで、小1の学習内容も大人が指導できていない。母子家庭で、母親は定職に就けておらず、生活保護を受給している。母親は学習環境を整えることに熱心ではなく、子どもは宿題や提出物を忘れることも多かった。

けんかを止めた施設代表者の男性は「学習の遅れや家庭の状況を前向きに受けられないよう、必死の努力が多い。支援には子どもへの気持ち、行動の背景を徹底的に想像力が求められることである。その子が居場所として施設を利用するようになって半年余り、徐々に勉強やスポーツに意欲的になり、自分に自信を持ち始めてきた。施設の男性は「放置すれば成長するにつれ、孤立していく可能性が高い。低学年から関わること、連鎖を止めたい」と、居場所づくりの意識を強く持つ。

■ 那覇市内の小学校の4代目の男性教諭も「学習に困難を抱えた子どもに言い訳しない傾向がある」と明かす。「どんな事情が

家族守る心情に理解を



居場所を確保する手だてだが、平教名、片仮名が苦手というケースもある。一歩支援

居場所に関する20代の女性は「分数や小数を理解できていない子は多い。小学校の学習内容はさかのぼって教えないければならない場面がよくある」と明かす。「だが本人はいまさら分からないとは言いたくない。まして友達がいる所では絶対言わない」

関わり始めた当初は「分からないところは適度しないでも、何でも聞いて」と言っていたが、質問する子はほとんどいなくなった。学習が苦手な子どもたちが「分からない」と正直に言えないこと、友達がいる前で初歩的な質問をできないことなどを想像できなかつたという。

「そもそも『分からない』のか分かっていないケース、勉強の仕方そのものが分からないというケースもある。自尊心を傷つけないよう、丁寧な教え方が難しい」と語る。(2)子どもの貧困「取材経・田嶋正徳」

本島南部の施設で中学生の学

火く木曜日掲載